



ハノーファー清掃公社

先日、ハノーファー清掃公社（通称 AHA）を見学した。同公社はハノーファー市周辺の21市町村、110万人



の地域を担当しており、約 1600 人が従事している。

ハノーファー市郊外に埋立地と、機械生物分解処理施設と生ごみコンポストの施設がある他、市から路上清掃を請け負っている。ごみ料金でコストをカバーし、独立採算で運営。案内してくれた職員は「ごみは資源であり、価値があるもの」と話し、誇りを持っている様子うかがえた。

ドイツでは家庭で「古紙」「びん」「生ごみ」「包装容器類（プラスチックなど）」「家庭ごみ」の5種類に分別している。「家庭ごみ」とはいわゆる普通のごみで、ちり紙やタバコの吸殻、食べ残しなどが対象となり、2014 年は住民ひとりあたり 174 kg だった。

回収された家庭ごみは、ごみに水を混ぜて6週間発酵させるなど、計9週間かけて処理する。そこから発生するメタンガスは 7000 世帯分の電力になり、うち半分を社内で利用している。2005 年まで家庭ごみはすべて埋め立てにしていたが、現在は法律で禁止されており、分別処理して残りだけを焼却することが許されている。

生ごみは、塩分が入っていない調理前の食材や、枝、草などが対象となり、コンポストにする。完成品は肥料として、市民は無料で入手できる。クリスマスにはもみの木を自宅に飾るのが一般的だが、用済みのクリスマスツリーは今季 900 t。これも粉碎して処理し、コンポストとする。

包装容器類は、商品から出るプラスチック類や缶、牛乳パックなどで、ゲルベザック（黄色い袋）で集められ、製造者責任によりメーカー負担でリサイクルされる。商品に、すでにごみ処理料金が上乗せされているため、消費者の負担はない。

生ごみと家庭ごみ処理は有料で、量や回収回数に応じて変わってくるが、1世帯あたり年間 150 ~ 200 ユーロ（19,000 円から 25,000 円）払うのが一般的。粗大ごみは年に2回まで、無料で自宅前まで取りに来てくれる。

ハノーファーは平らな土地だが、一番高いのがごみを埋めた山だ。「ごみは見えるように積むことで、ごみを減らさなければという意識を高める」と以前聞いたことがあったが、どこまで本当かわからない。2005 年までは、多くの自治体が分別なしで埋め立てていた。

紙面が切れてしまったので、詳細は次回に続きます

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

ドイツで子育て



お正月に3週間里帰りし、明はまた日本の小学校に通いました。1、2年生の夏に同じクラスに入れてもらったので、顔見知りです。冬休みを挟んで4日間通ったのですが、クリスマス会や掃除、終業式や始業式などでほとんど通常の授業はなく、遊びに行ったようなものでした。

ドイツには終業式や始業式がなく、全校生徒が体育館や校庭に集まることもないので、とても新鮮だったよう。「前ならえ」「右向け右」が大好きで「ドイツにもあったらいいのになあ」と言います。

通学したのは数日だけど、冬休みの宿題はドリル、工作、日記と大忙し。工作の貼り絵はみな見本どおりダルマを作っており、明一人ドラえもんでした。日本ではきちんと課題どおりするのですね。先生が「よくできた」とほめてくれたのが救いです。夏休みも行くと今から楽しみにしています。